

# 収穫祭は 山桜の里 戸赤 新ソバとクマ汁で

受益者で戸石・小屋の大堰草刈り作業を終え、区の共同作業に合流して行われたやまざくら学校雪囲いと広場のイス・看板撤収作業は手際よく完了。収穫祭には十五世帯二十人が参加しました。  
この日の早朝、渡部利、星隆さんは新そばを打ちました。数日前から木地工房で下準備をしてもらっていたクマ肉は柔らかく、当日の味付け調理もよく仕上がりに、昼食会は大好評でした。

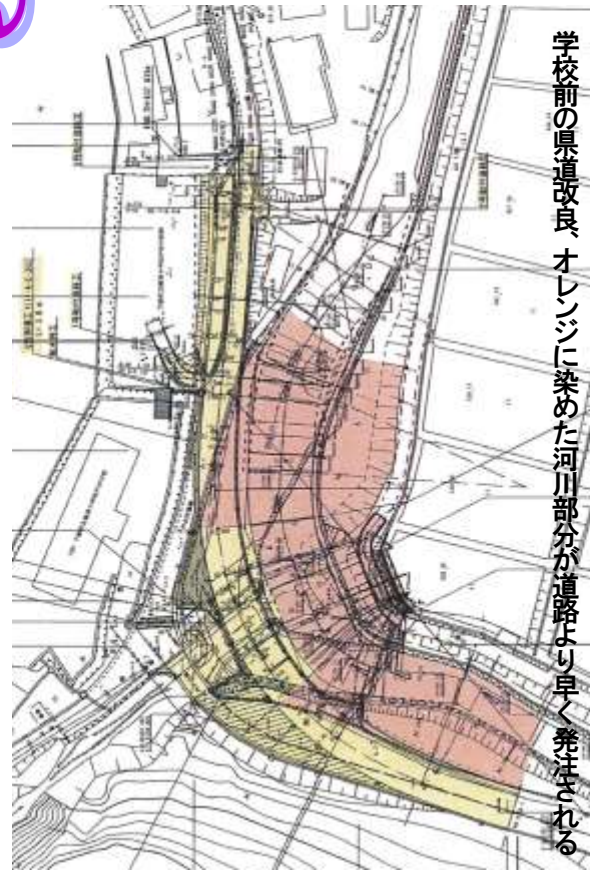


11月9日、収穫祭の席上、町へ提出した重点要望事項の説明もあった

## 冬に備える



やまざくら学校の指定管理料、来年度は要望しました



学校前の県道改良、オレンジに染めた河川部分が道路より早く発注される

### 【右図】県入札公告(抜粋) [河川部分の発注]

工事名 道路橋りょう改良工事、工事場所 戸赤地内、工事概要 道路改良 L=110.0m・W=5.5(7.0)m、完成期間 工期 259日、落札者の決定予定日 平成27年1月6日

【木地の学習No.49】会津領内での移動 木地材を求めて移動するのは木地師としての宿命であった。まず始めに、比較的資料が残されている田島町の藤生小屋について動きを見てみると、…。寛政二(1790)年、針生村から貞右エ門一家五人が移動してきたのが藤生小屋の始まりである。それから四年後の寛政六年に、同じ針生の木地小屋にいた彦右エ門一家四人が引越してきて都合四軒になった。…。しかし、彦右エ門は、藤生小屋三年にして、入小屋村戸板沢へ移動している。この当時藤生木地師の旦那寺は、藤生寺と若松の本光寺であった。天保初年には、伊蔵家一軒残るだけになったが、間もなくこの一家も藤生小屋よりどこかへ移動したものである。寛政二年から天保初年まで、四〇年間にわたって存続した藤生小屋は、一旦無住になるが、その後、嘉永五(1852)年久四郎一家が居住し江戸時代まで続くことになる。次は関本小屋を見てみよう。久四郎一家は、文政十年当時は針生黒森小屋に居住、天保の末ごろ、関本小屋に移る。その頃すでに、天保初年に藤生小屋より移った西右エ門一家が住んでいた。その後、嘉永の始め頃土倉小屋より関本小屋へ移った次郎右エ門と平左エ門一家を迎えて木地小屋四軒を数えることになる。安政二(1855)年、次郎右エ門は布沢へ、平左エ門は貴中に移動したため、関本小屋は二十数年で消滅した。「(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)」



木地工房

クマ汁・しんごろうでおもてなし

刈林さくら会や町内の食生活改善推進員育成講習会などの利用があり、木地体験やしんごろう会で木地工房はにぎわいました。十月二十二日は刈林二十八人、十一月六日は食生活改善推進員九人が楽しんできました。食生活改善推進員の感想をお聞きしましたので紹介します。

木地師小椋さんの指導の下、かつらひのきを使って器を作り、奥さんからは地元の保存食伝統食の話をお伺いしました。

小椋さんは木地工房を始めて十年、もともと戸赤地区では木地挽きが行われていました。樹種の特性により器の種類が決められるそうです。

昔木地は若松に出荷され、うるしがかけられ会津漆器になりました。安価にできる食器類が出来るよ



うになると、手間のかかる木の器はすたれ、木地作りで生計を立てる人はいなくなつたと言います。また、キノコ、山菜の塩漬けなど、この地区ならではの食べ物の話を聞かせてもらいました。採ってきた食材は無駄なく使える工

夫がありました。この日のごちそうはしんごろう、クマ肉、しんの煮物、きのこ汁などで、素朴な味わいを楽しむことができました。これらの料理は材料の保存、下処理調理とも時間がかかり、雪深い地域の

町進展の貢献に栄誉

下郷町自治・教育功労者表彰 下郷町と下郷町教委 述べ、佐藤一美町議会の自治功労者・教育功 議長があいさつした。 労者表彰式は八日、町 星町長と白石光史町教 育委員長が一人一人に 表彰状と記念品を手渡 した。 町の進展などに貢献 した。 星学町長が式辞を 星公正県議、佐藤正史

刈林さくら会のしんごろう会

職員36年5月、星登雄副町長5年8月、町職員40年、自治功労者表彰人(教育委員12年、委員2年9月)、▽頭影(湯田京己、星文久、星隆雄(駐在員8年、鈴木利(同8年) 五川慶典、佐藤重夫(農業委員9年)、星孝子(民生委員9年、副会長3年)、渡部つめ子、五十嵐伝(民生委員9年)、星義秋(農事組合長14年)、高橋修一(統計課長1年)、星孝子(民生委員9年)、山田市博(同14年)、星井静江(同23年)、星井伸子(教育委員9年7月)、星井伸子(同18年)

「しもごろう」下郷町観光協会のキャラクターの紹介記事 (26.11.6 福島民報)

統計調査員二十三年務めた室井静江(戸赤)さん。町の自治功労表彰を受ける(26.11.11 福島民報会津版)

(ストーリー性のある村づくりに) [No.18]・下郷町史 土器の製作と使用が特色の縄文時代のはじまりはいつだったのか。…ととにかく少なくとも4~5000年前からこの日本列島に縄文人が住みついてことは確かであろう。…。南会津においても伊南の堂平遺跡や館岩の松戸ヶ原遺跡・田島の上ノ台遺跡・寺前遺跡・本町栗林遺跡・湯野上遺跡・萩原遺跡など郡内の縄文中期の諸遺跡は遺跡の数も規模も他の時期に比べて格段に拡大して出土品も多く、湯野上遺跡では四棟の竪穴住居が確認され、定住性が認められるが、縄文時代は狩猟・漁撈・採集が衷心のいまだ農耕社会には達していない社会であったと考えられる。縄文時代の時代区分 草創期・早期 草創期の遺跡としては、会津若松市笹山原遺跡から隆線文土器や爪形文土器が出土しているが、南会津では発見されていない。…。南倉沢遺跡は南会津を代表する遺跡で、縄文早期・前期・後期の豊富な資料と平安時代の竪穴住居二棟が確認されている。南倉沢遺跡や明神・道州・稲干場・木賊各遺跡からは早期中葉の田戸下層式土器片が発見されている。南倉沢・瀧平遺跡からはこれに続く田戸上層式土器や喜多方市塩川の常世遺跡出土品を標識とする常世式土器が出土している。…。「下郷町史」第7巻通史編(発行・下郷町)より出典(続く)